

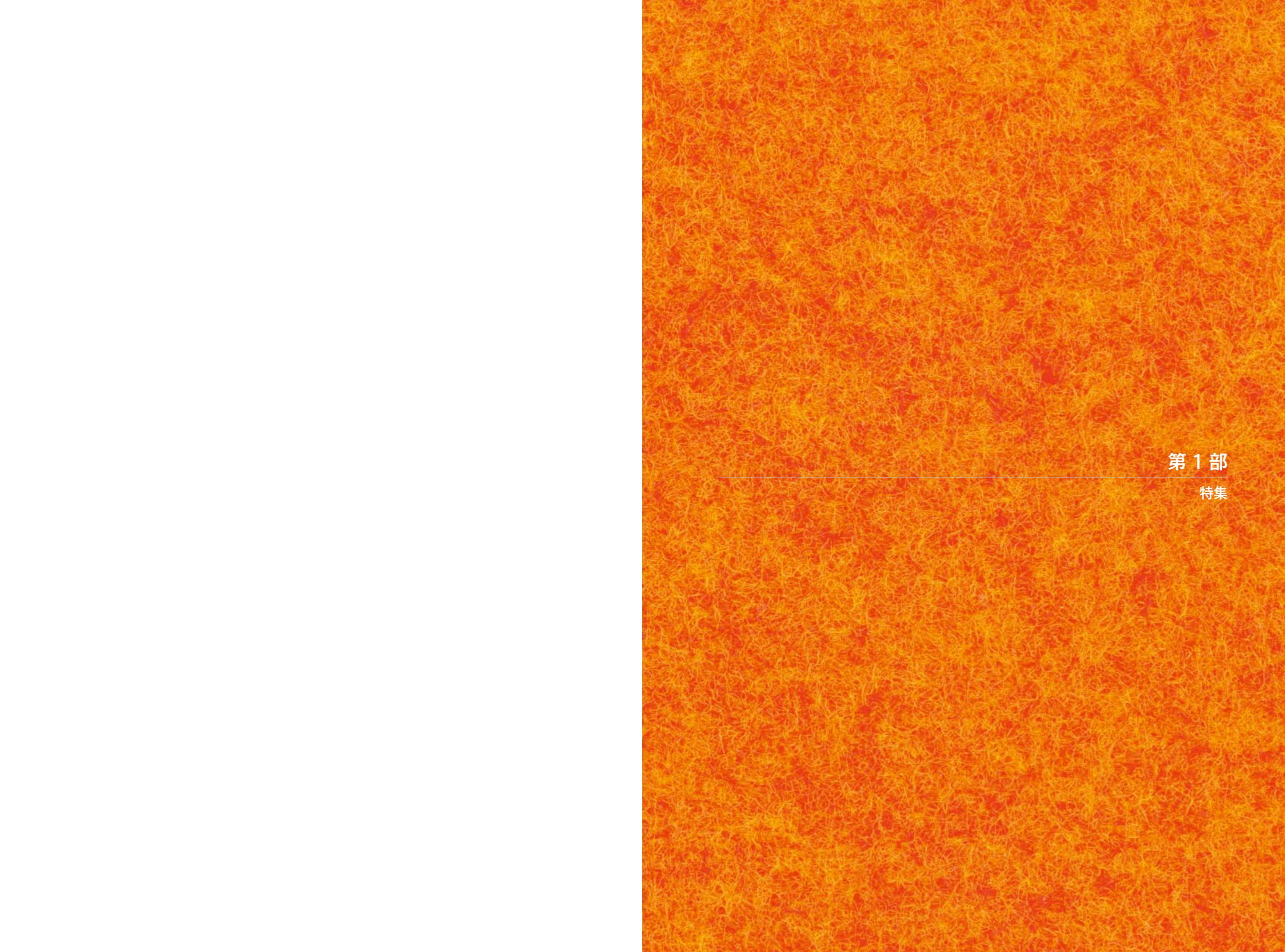


Title	Interview センター長は夢中
Author(s)	
Citation	Communication-Design. 2008, 1, p. 10-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12408
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka



第1部

特集



特集 **CSCD**
OnLine

新しい大学院教育、社会に開かれた知を目指して動き出した
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター。

大学と社会に接続され、まさしく活動中のこのセンターを、
センター長インタビュー (Part 1)、活動フォトレポート (Part 2)、
教員の生の声 (Part 3) を通して紹介します。お楽しみください。

文・編／オレンジブック・プロジェクト

1 Interview

センター長は夢中

「私はCSCDのファンである」。そう自称する金水敏教授は、コミュニケーションデザイン・センターに設立前史よりかかわり、2007年4月からセンター長を務めています。同センターの設立経緯から現在、そしてセンターが描く未来のコミュニケーションデザインと大学について伺いました。

Q. コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）はどうしてつくられたのですか？

たとえば、環境汚染や遺伝子治療など、科学技術の先端的な問題は私たちの生命と安全に深くかかわっています。しかしこういった問題の理解には高度な専門的知識が必要となるため、私たち一人ひとりがそうした問題の発生する仕組みや解決の方法を理解したり、構想したりすることは容易ではありません。科学技術政策における意思決定の場面から、医療・福祉・教育・芸術など個々の臨床的な現場での意思決定の場面まで、利害や立場の異なる当事者のあいだ、とりわけ異なる専門家、専門家と非専門家のあいだに、双方が十分に理解しあえるための適切なインターフェイスのしくみが欠けています。

このセンターは、「専門知識をもつ者ともたない者のあいだ、利害や立場の異なる人々のあいだをつなぐ、コミュニケーションの回路を構想・設計・実践すること」を目標として、2005年4月に誕生し、現在に至るまで全国の大学のなかでもユニークな活動を繰り広げています。「コミュニケーションデザイン」とはこうした試み全体を指しています。

Q. どんな人たちで構成されているのでしょうか？

センターの“ミッション”を実現するために、科学技術社会論、看護学、医療紛争、法廷外調停、人類学、芸術学、プロダクトデザイン、景観デザイン、臨床哲学、劇作家、アート・プロデュース、舞台芸術制作、社会学、心理学、減災（災害研究）、ヒューマンインターフェース工学、メディアデザイン等さまざまなバックグラウンドを持つ多彩な人材が集められました。

また、大阪大学は2007年、大阪外国語大学と統合しましたが、同大からも多彩な4名の教員にCSCDを担うメンバーとして参画していただくことになりました。（P16の新しい教員スタッフを参照）

多彩な人材

知的資源を社会へ

Q. さまざまなバックグラウンドを持つ人材が集まっているということですが、その人たちはどういう活動をしているのですか？

CSCDの事業には3本の柱があります。一つは、全学の大学院生を主な対象としたコミュニケーション教育の提供、もう一つは社学連携活動の展開、そして三つめは他ならぬ「コミュニケーションデザイン」の研究です。この三つは、もちろん緊密に絡み合っています。教育プログラムの提供は、さまざまな専門教育を受けた大阪大学の学生・院生に、社会との円滑なコミュニケーションの必要性を気付かせ、その実現への力をつけることを目的としています。社学連携事業は、文字通り大学が大学の中に閉じこもるのでなく、その知的資源を広く社会に開いていくとする試みであり、それ自体がコミュニケーションデザインの実践です。またその活動の中に学生を巻き込んでいくことで、社会の一員としての大学たる自覚を涵養しようとしています。そしてこれらの事業の基礎となるのが、「コミュニケーションデザインとは何か／コミュニケーションデザインはどのように実現されるか」という、根本的な哲学の構築であるわけです。

●センター長



金水敏（きんすい さとし）

大阪大学大学院文学研究科教授。2007年よりセンター長を兼任。国語学、言語学を専門とし、文法に関する歴史的研究からさまざまなメディアに登場する現代の日本語の研究に至るまで、守備範囲は広い。「博士」として登場する人物は「…なのじゃ」という言葉を使う、という役割語の研究でも知られる。著書『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』（岩波書店、2003年）など。

プロジェクトの成果から



Q.センターはどこにあるのですか?

キャンパス内に適当なスペースが見いだせなかつたこともあって、吹田キャンパスからほど近い、千里万博公園前の万博記念機構ビルに間借りをして出発しました。間借りとはいって、事務スペースと教員スペースが共存するコミュニケーションの図りやすい空間です。ここを拠点としながら、活動ごとに学内外のさまざまな場所に出かけて行きます。また、2008年度中には豊中キャンパスに移転する予定です。

間借りで出発

①大学キャンパス

大阪大学は、大阪府豊中市待兼山に位置する「豊中キャンパス」と吹田市万博記念公園に面する「吹田キャンパス」からなり、さらに2007年秋より、大阪外国語大学との統合を経て箕面市「箕面キャンパス」がこれに加わった。CSCDの大学院生対象の「コミュニケーションデザイン科目」は各キャンパスにて開講されている。

Q.どういう経緯でセンター長になられたのですか?

私とCSCDとの馴れ初めはCSCDの前史に遡ります。2002年、21世紀COEプログラム「インターフェイスの人文学」が始まった時、私は同プログラムに事業推進担当者として参加しました。その活動の中で、プログラムの目指す領域横断的な新しい人文学を模索する活動を、拠点リーダーである鷲田清一・文学研究科教授（当時）とともに進めました。大阪大学の法人化後は、鷲田理事が室長を務める全学の教育・情報室の室員として、後にCSCDとなる新デザインセンターの構想ワーキンググループに参加しました。CSCDの開所後2年間は直接的な関わりはなかったのですが、COEプログラムとの連携や人的交流等もあり、親しみを持ってその活動を見守っていました。そして2007年4月、縁あって、初代CSCDセンター長であった中岡成文・文学研究科教授のあとを受け、2代目センター長に就任しました。

① COE

21世紀COEプログラムとは、世界的な研究教育の形成を重点的に支援し、国際競争力のある水準の大学作りを推進するために、文部科学省が平成14年度より実施しているプログラム。

「複数文化の錯綜のなかで発生するさまざまな社会問題にアクチュアルに対応できる新しい21世紀型の人文学をデザインする」ために、専門分野のあいだ、自文化と異文化のあいだを横断する「行動する知」を模索、実践することが提唱される。そのうち「臨床と対話」研究グループが、医療・福祉・災害・科学技術などの問題を担当。

※1 文部科学省 21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」（大阪大学文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科）

報告書にて、「科学技術コミュニケーション」「専門家／非専門家の双方向的コミュニケーション」「社会を横断する臨床コミュニケーション」の3つの観点から、垣根を越えて社会のさまざま問題を解決するためのコミュニケーションモデルと、それを実際に教育研究する機関の必要性が提言される。

※2 平成14-15年文部科学省・科学技術振興調整費

2005年4月、宮原総長の構想のもと、教育担当理事・副学長の鷲田清一が中心となり、「コミュニケーションデザイン教育事業の推進：コミュニケーションデザイン・センター※3」に基づいて、CSCDが設置される。

※3 文部科学省に申請された概算要求・特別教育研究経費・事業名

「インターフェイスの人文学」 2002~06年^{※1}
宮原秀夫前総長が大阪大学の教育目標として「教養・デザイン力・国際性」を掲げ、3つのセンター設立が計画される。

科学技術政策提言「臨床コミュニケーションのモデル開発と実践」 2002~03年^{※2}

2002

2003

2004

2005

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター設立をめぐる大阪大学の動き

国立大学法人化

ユニークな活動

Q.センターの活動を外から2年間見ておられたということですが、
その様子は金水教授の目にはどう映りましたか？

今までのどこの大学にもないユニークな活動を活発に展開し、とても勢いがあつて魅力的に見えました。2005年7月のオープニングイベントで平田オリザ教授がデモンストレーションとして見せたコミュニケーション・ワークショップは、かつて経験したことのないアプローチがとても新鮮でした。また阪急梅田駅構内で行われた公開討論会「カフェバトル」^{*}や、京阪電車・中之島新線の工事中の駅で実施した「コミュニケーションカフェ」には、大学がこんな活動もできるのかと、正直驚きました。また、大学院生に対する共通教育の提供も魅力的でした。こういった一連の活動は、ロゴなどのアートワークも含めて、俗っぽく言えば、とても“かっこいい”と思いました。私は、CSCDの“ファン”であることを自認していました。※P51参照



Q.センター長になられて、いかがですか？

センター長となって1年近くが経過しましたが、“ファン”としての思いは未だに消えていません。コミュニケーションデザインという概念は、いつも大学人としての私を鼓舞しますし、CSCDは未だに、大阪大学の、あるいは日本の大学の“夢”を担い続けていると思います。しかし一方で、夢を一つ一つ実現へと結びつけ、理念を現実に着地させていく作業の困難さも、当然ながら感じることになりました。多彩なバックグラウンドを持ったセンター員をまとめていくこと自体がコミュニケーションデザインの実践です。そして個々の魅力ある活動が、全体としてどのような絵を描くことになるのかも具体的に構想しなければなりません。また、施設面や資金面での制約などの、大学に置かれたセンターとしての現実的な問題にも当然直面させられました。ですが、こうしたことでも今までの大学にはない新たな課題・挑戦として、楽しみながら積極的に取り組んでいくつもりです。

日本大学の夢

①新しい教員スタッフ

小林恭（こばやし きょう）

デカルト、アランの研究から出発し、「禅と現代世界」に関する共同研究に関わる。現在はシモーヌ・ヴェイユやナイチンゲールの思想研究のかた、人間を「ボディー：マインド：スピリット」の全体性として、かつLifeを「生命：文化的生（人生）：宗教学的のいのち」の全体性として問う視点から、ケア、コミュニケーション、異文化理解等の問題とスピリチュアルな次元とのかかわりを考える。

林田雅至（はやしだ まさし）

ボルトガル語を軸に、美学、図像解釈学、石見銀山、ボサノバフェスティバル、世界陸上選手権大会など社会の諸活動と連携する。石見銀山世界遺産登録プロジェクトでは、歴史文献調査団として貿易文書発見・整理作業に尽力するほか、展示検討委員として図版解説・翻訳、ロジスティック、展示美術品交渉担当なども手がけた。異文化交流や外国人サポートにも精力的に取り組んでいる。

高田珠樹（たかだ たまき）

ドイツ哲学・思想を研究し、授業で現代ドイツの様々な動きを紹介しながら、社会の諸問題に関心をもつ。インターネットを通して発信される膨大な量のラジオやテレビのニュースや討論、教養番組を、各種端末プレイヤーで随時視聴するのが日課であり、視聴覚メディアを授業や教養教育に用いる方策を考えている。訳書、スローダイアクリ『シニカル理性批判』（ミネルヴァ書房、1996年）。

森栗茂一（もりくり しげかず）

民俗学を出発点としつつ、工学や土木の領域以外の専門家としては異例のモビリティ・マネジメントの第一人者でもあり、観光ツーリズム、復興住宅コミュニティづくり、住民の協働による合意形成を通して、各地の交通まちづくりを牽引するなど多彩な活動を繰り広げる。『河原町の歴史と都市民俗学』（明石書店、2003年）など著書多数。（P24に関連情報）



左から、林田教授、高田教授、小林教授、森栗教授

→ グローバルコラボレーションセンター設立

「インターフェイスの人文学」 2002~06年

2007

鷲田清一教授が総長に就任

10月 大阪大学と大阪外国語大学が統合

2006

Q.本書『Communication-Design』はどのように読んで欲しいですか？

昨年度発行分が0号、今号が1号になるわけですが、本書こそ、センター員それぞれが自らの活動を踏まえ、またお互いの活動に協力していく中で培ってきたコミュニケーションデザインへの接近の、道程を刻んでいるのです。

読者の皆さんもどうか、コミュニケーションデザインを実践する心持ちで、“読む”行為を通して我々の活動に参加していただければ幸いです。

Part 2